

マカルー東稜初登攀

山本宗彦

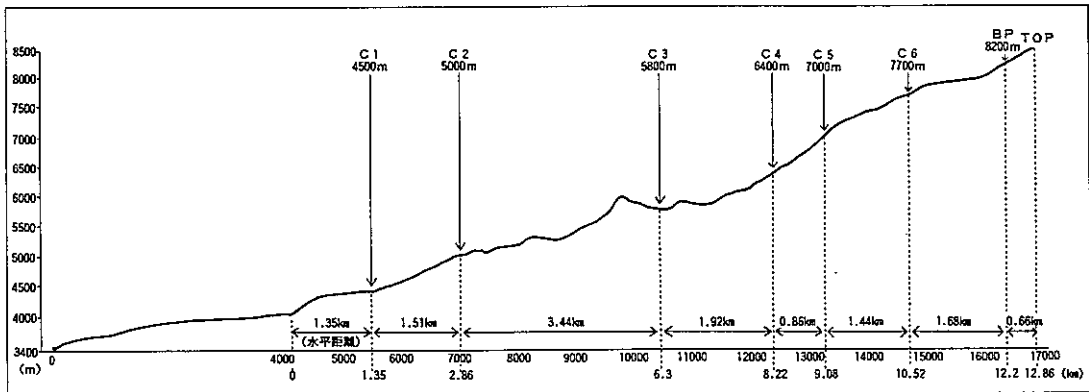
今年の2月から約3ヶ月半にわたり、世界第5位の高峰であるマカルーに行って来ました。目標としたのはマカルーのチベット側に延びる東稜でした。結果から申しますと、2回にわたり計8人の日本人が登頂しましたが残念ながら完登は成りませんでした。最後の約7,300m付近から始まる岩稜は種々の要因によって割愛し迂回ルートから7,600m付近でノーマルルートに合流しての登頂だったため、この登山は厳密な意味では失敗ということになりますが、諸々の要因を考慮してまあ80点くらいの出来かと考えています。今回は登攀の模様を旅行記風に概説するのではなく、タクティクスを中心にこの山をどう登ろうとしたかということをお話したいと思います。

そもそもこのマカルー東稜はかなり顕著な尾根であるにも関わらず政治的な理由も手伝って今まで手つかずでいました。そのため最初から極めて情報量の少ないことが大きな特徴でした。まず写真がないのです。この情報化社会の中でしかも8,000m峰でありながらその全貌を写した写真がないというのは極めて珍しいことだろうと思います。勿論全く無い訳ではなく、7,300mから頂上までの最後の岩尾根の写真はありましたし、また、カンチェンジュンガから望遠レンズで撮影した東稜の写真はありました。しかし、全長が10km以上（後に地形図で計算したところでは12.86km）の尾根の大部分の細かい所は全く分かりませんでした。雪稜なのか、氷の稜なのか、ミックス稜なのか、岩稜なのか、またはそれ以外なのか、そして稜通しに行けるのか行けないのか云々。はっきり言って組み合わせがどんな相手なのか分からない訳ですから作戦の立て様がないというのが正直なところでした。と言う訳で、まずは最近発行されたマカルー東面が記載されている10万分の1の地形図、これも行くまでは正しいかどうか分からなかったのですが、この地図を使って古典的な方法で東稜の断面図（資料1）を作りました。これにキャンプ予定地と水平距離、高度差等を記入し、遠望した写真からの推測で地形等を判断して各キャンプ間のルート工作を原則3日として全体の運行を作ったのです。

なお、言い遅れましたがこの尾根の最大の特徴であるところの“未知”と“長さ”を克服するために基本計画は古典的な極地法を採用しました。先の様な状況を踏まえたくて各パーティを3人1組として4パーティで日本人登攀隊員は計12人。ルート工作は全て日本人隊員が行うということで日本人パーティはルート工作、ルート整備、そして荷上げを分担する。さらに長い尾根で大量の物資が必要となると考えてネパールのシェルパを12名を荷上げ要員として雇用しました。それにサードとコックが各1名、日本人マネージャーと医師、報道隊員、中国人連絡官等で総勢は33名となりました。

基本運行は実働が45日で予備が15日、計画時は2回に分けて6名の登頂とし、予備が余った場合のみさらに3名の登頂をもくろむということで作りました。全員登頂が主流の現在ではなんとも旧態依

1. 登山の記録

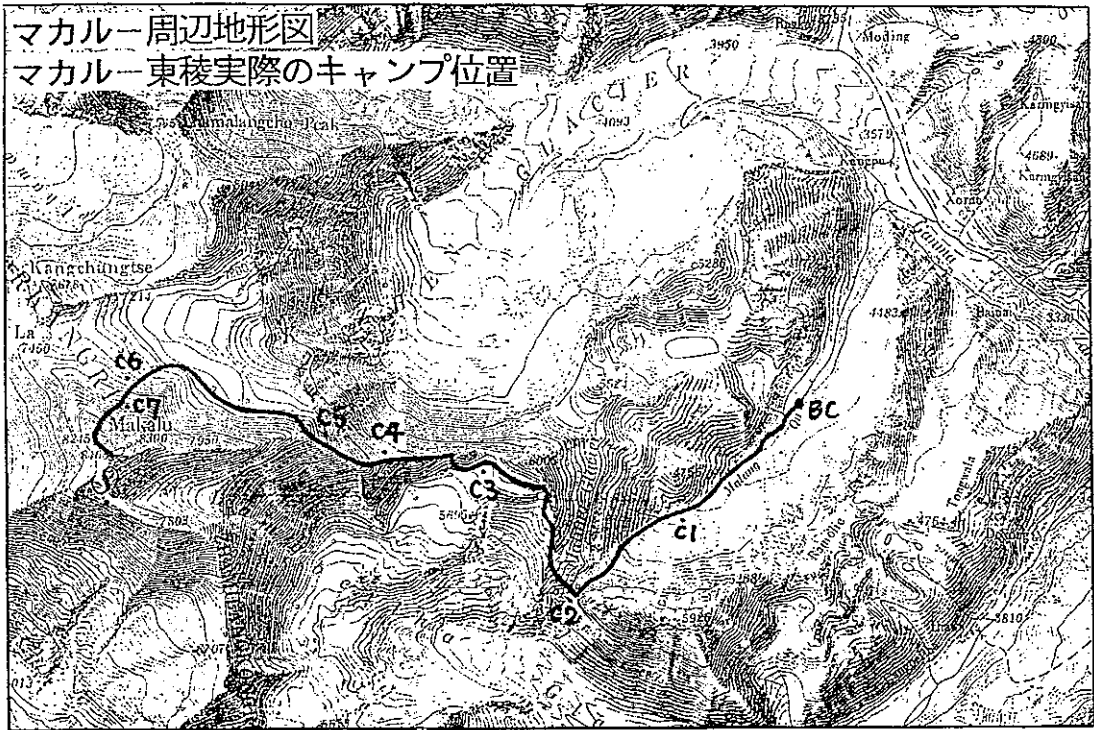


資料1 マカルー断面図（高度距離図）及びキャンプ位置（計画時）

然とした計画の様ですが、訳の分からない相手に向かうにはこれくらいの慎重さが必要だと判断したためです。更に隊員個人の力量とチーム全体の力量の掌握と向上ですが、本隊出発前に計3回の合宿を行いました。1994年5月の剣岳、同年8月の剣岳、さらに暮れの富士山に於ける山行です。1回目の合宿は顔見せ的な要素を否定出来ませんでした。2回目の合宿は剣沢に天幕を張り毎日池の谷まで登攀に出掛ける計画としました。合宿中1名が肩を脱臼し（原因は不明）早速その救助を全員で行うことになりましたが、本人には申し訳なかったのですが逆にその様な状況のなかで隊員の掌握には好都合となりました。さらに下でのトレーニングについては一応の目的的なものは示しましたがそれを各自が実行していたかまでは管理していませんでした。

さて、実際の登山においてはまず東稜に取付くまでが第1の関門となりました。キャラバンルートが分からないのです。そのため本隊に先立って2月15日には偵察隊が出発し、先にBCまでのルートの確認及びBCの特定を行うこととしました。しかしこれはこの年の記録的なチベットの大雪に加え、手さぐり状態のルート探しによって予想以上の時間がかかり、ついにBCの特定までは達成出来ませんでした。結局本隊と合流後にもう一度先行する形でBCまでのルートの選定とBCの特定を行いました。情報が無い中で地形図と現地の状況を見ながらの判断は、すでにこの時からマカルー東稜登攀の有り様を暗示していた様ではありましたが、今考えてみるとこれが登山の原点ではないかとも思えます。さて、偵察の結果BCはカンシュン川の支流であるマラン谷の中、標高3,980mの地点に建設しました。時に3月30日で予定よりも2週間も遅れていました。

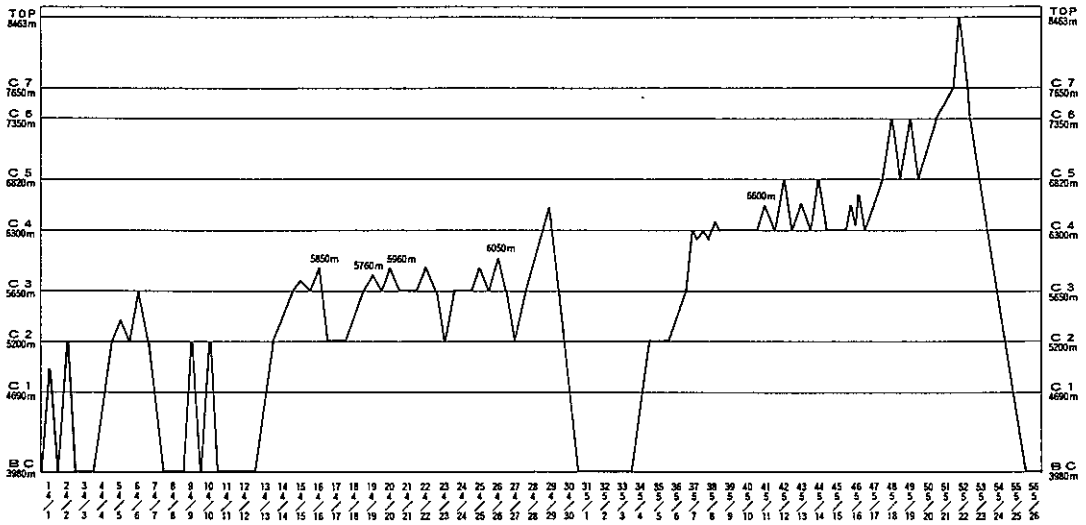
マカルー東面のチベット側はチョモランマのチベット側とは全く違い、ネパールの様な森林地帯です。まるで日本の山の様な景観で、大きな木にサルオガセが揺れる光景は中々にロマンチックですが要するに降水量が多いということなのです。BCまでのルートも藪漕ぎや若干のラッセルがありましたが、BCからC1、C2、そしてC3までは猛烈なラッセルを強いられました。特にC2までは所によっては腰までのラッセルを強いられたため輪かんじきを履き、それでも深いところではももまでの



ラッセルになりました。C1は後にチベット人による荷上げのために4,690m付近に建設しましたが、先に谷のどん詰まりのコル上の5,200mにC2を建設しました。ここから基本的には尾根上をルートとしましたが、C3までは一部岩混じりのミックス稜となる様に観察されたため尾根の側壁を大きく巻いてルンゼと側壁のきわを上り再び稜上に出るルートとしました。5,650mのC3付近は雪原状で、その雪原を出来るだけ使って距離を稼いだ後に再び稜上に出ましたが、この前後からが第1の核心部でした。ヒマラヤひだのフェースから東稜上に出たのですが、この稜線は手の切れる様なナイフリッジにキノコ雪や巨大な雪庇が張り出し、それが垂れたアイスクリームや氷塔が乱立する様な形状となり極めて不安定な稜線となっていました。さらにヒマラヤの東面の特徴かとも思われるので今後の参考となればと思うのですが、雪がガラスの粉の様にスカスカなのです。いくら踏んでもなかなか固まらず、もちろんスノーピケットもききません。そのため支点は掘出した岩に部分にロックハーケンやボルトを打ち込んだりまたは氷の部分にアイスハーケンを打ち込んだりするのですが、この氷がくせもので、氷の下は空洞になっているのです。ですから氷に打ち込んだアイスハーケンがどんなに効いていてもその氷ごと崩落する可能性がある訳で、非常に緊張を強いられました。そんな訳でこの部分は1日で1ピッチ50mしか進めない日が3日～4日続き、先が見えない毎日でした。その先は露岩混じりのミックス壁状の尾根となり、部分的には20mから30m程のスラブの完全な岩登りも交えた登攀となりました。

1. 登山の記録

山本宗彦行動表



その上部でも氷壁のトラバースを始めとする不安定な登攀を強いられましたが、6,820mのC5までは基本的には同じ様な状況が続きました。その様な状況の中でルート工作隊の次にすぐに荷上げ隊を登らせることが出来ないため、ルート補修隊を何回か出しながら荷上げ隊に追いかせました。当然荷上げ可能重量も5kgから7kgくらいは減らさなければならず、そのため荷上げ回数が増える結果となりました。従って結果的にはC3からC4までのルート工作は13日かかり、さらにC5までのルート工作は14日もかかりました。そのためC5の上部の約7,200mで上部岩稜の基部に出た時はすでに5月中旬となっていたためにモンスーンの襲来を懸念して上部岩稜の登攀は断念しました。上部岩稜の登攀は困難ではあっても危険はさほどでもなさそうでしたので今後挑戦の価値はあると思います。ただし、下部が余りにも危険なため、たとえばチョモレンゾの北稜からつなげるとかの方法もありますがそれもきつと極めて困難でしょうね。しかしネパール側のノーマルルートからつなげるのではあまりにもこじつけすぎて価値がないでしょうし、なかなか難しいですね。

私たちは最後はマカルー東稜上部岩稜とチョモレンゾの間に広がる大氷原の駆け抜けて7,500m付近でネパールからのノーマルルートに合流しました。あとはそのルートで登頂しましたが、BCから登頂までは実に52日かかりました。アタックにはロシア製酸素ポンベを1人1本使用し、毎分2ℓの使用で十分通用しました。登頂日は風もなく穏やかな日で帰りのためにロープを固定しながら余裕を持って登りました。頂上は前日の第1次アタック隊が踏んだ後でしたので少々乱れていましたが狭い尖った様な頂上らしい頂上でした。また隣のチョモランマは思いの外小さかったのが印象的でした。

今回の最大の特徴は“未知”ということだったと思いますが、現地状況に応じてそれにどう対処するかという応用力を試された登山であったと思います。応用力というのは単なる技術的な側面だけではなくルート選定の能力や、またルートの放棄や再開を繰り返す中での粘り、そして危険な状況

1. 登山の記録

に感覚が麻痺しない力等のあらゆる面を含みます。勿論私たちがその全てをこなすだけの力があつた訳ではなく、隊員1人1人の長じている部分でカバーし合い、さらに天の運が味方してくれたことは否定出来ないと思います。

それにしても日本の冬山で培った力で“未知”に挑戦するというのはやはり登山の大きな醍醐味だと思います。先にあげた様な面は日本の冬山で十分養成が可能な内容であり、逆に日本の冬山を登り込んでいない者はヒマラヤでも信頼出来る動きは出来ないと思ひました。私たちはその様な登山の原点とも言える醍醐味を経験できたことに感謝し、今後の自分たちの登山の糧としたいと思ひます。

(日本山岳会マカルー登山隊登攀隊長)